
生まれ変わり大作戦！

黒木 かさね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わり大作戦！

【Nコード】

N0545X

【作者名】

黒木 かさね

【あらすじ】

生まれ変わった私は、異世界の貴族令嬢として過ごしていた。周囲には可愛らしく賢く、左うちわで気ままに過ごそうとしていた私だったが、それは王子様との出会いによって変更を余儀なくされる。

ガール・ミーツ・ボーイ？

その時。望まない騒動のファンファーレが高らかに鳴り響いた気がした。

*

金髪の美青年に抱き上げられて、頬にキスをされた。

「おはよう、可愛い僕のお姫様」

「おはようございます、おとうさま」

昔だったら思わず、しょっぺー、と身悶えてしまいそんな行動も、今となってはお手の物。

パプロフの犬のように、頬にキスをされたら反射的にしてしまうようになった。

「おはよう、綺麗な僕の奥さん」

「おはようございます、貴方」

目のやり場に困る両親のラブラブっぷりも、今では気にしないでいられるようになった。

食事中も、無駄にいちやいちやしている両親を視界に入れないように食事をする。

ピンクい空気にならないだけマシだと思っしかない。
これももう慣れた。

「そういえばシャル、君はもう教本の一章を終わらしたのだったね？ 先生が驚いていらしたよ」

「はい、おとうさま。シャルはがんばりました」

「礼儀作法の先生も、貴方の習得する早さに驚いていらしたわ。頑張っているのね、凄いわシャル」

「はい、おかあさま。ありがとうございます」

普通、どれだけ頑張ったとしても、たかだから歳児ではそこまで理解が出来るはずもない。実際、私を担当する勉強とマナーの講師は、私のことを天才だの神童だのと称しているというし。

だがうちの両親は天然なのか大物なのか、それとも私が初子だから一般的な子供の成長速度を知らないせいなのか、すべてを凄いの一言で終わらせてしまっていた。

異端として見られるよりもそちらの方がありがたいので、私としては2人にはそのままでもいい。

大人は、私のことを賢いと褒める。

親戚や侯爵家で働いている侍女は、私のことを可愛い、同世代の子供とは違う、と褒める。

そりゃそうよ。それなりに賢いのも、可愛いのも、そう見えるように見せているんだから決まっているじゃない。

本来の5歳児には出来ないだろうけど、私には出来る。

何故って、私ことシャーロットは転生してきたのだから。

*

シャーロットとなる前の私は、異世界の日本という国にいた。

世界の中でも高水準の教育国家の国民だった私は、それなりに教育を受けてきていた。

その下地があるから、今は天才だと言われているけど、将来はただの凡人以下なおばさんになるだろう。異世界にきて私の能力値は今は限界だ。悲しいがこれ以上、上にはいけそうにもない。

だから、シャーロットが賢く見えるのはそれらしい言動をするからだし、可愛く見えるのもそう見られたいと研究した成果なのだから、ある意味でそう見えるのは当然だ。

小賢しいというなかれ。生きるための賢い知恵といってくれ。

私が子供らしく生きていくためには、私の今いる環境は少しばかり、いやかなり生き辛い環境だった。

私の地位は、侯爵家令嬢。

そして侯爵家唯一の子供だ。

要は現段階では侯爵家の次期当主となる。とはいえ私のいる国は男尊女卑が激しいので、私が当主になることはないだろう。けれど、両親の間に弟が生まれない限り、私の伴侶が次の当主になってしまうのだ。

貴族というのは怖い。

こんな子供だろうと、私をこの位置から蹴り落とそうと虎視眈眈と狙ってくる親戚のおっさんはいらるわ、私の伴侶の座に納まろうと婚約者としてどうですかと自分の子供を売ろうとするおっさんはい

るわで、ただの子供だったらずに足元を掬われかねない環境にあった。

「というか、私シヨタコンじゃないので子供の婚約者はちょっと……あ、でも私も子供か。いやでもシヨタコンじゃないのでお子様はお呼びでないな。」

だからといって、年上のお兄さんでも、向こうが嬉々としてやってきたならロリコンの可能性があるので、それも困る。

「……いっそのこと、逆紫の上をやってみるのもいいかもしれない。好みの美少年を侍らして、ってそれは逆ハーレムだって私。」

「シャル、聞いているかい？」

「……ごめんなさい、おとうさま。すこしばうつとしていました」

父親に声を掛けられていたことに気付かず、素直に謝る。

まさか逆紫の上とか逆ハーレム計画を妄想していたとは口が裂けても言えない。

父親は困った子だな、でも可愛くて仕方がない、という顔をしてこちらを見ていた。愛情たっぷりなその視線にむしように全身が痒くなる。

両親は政略結婚だったが、互いに一目会った瞬間に恋に落ちたらしい。というのは両親の友人談である。

嘘っぱいが本当の話らしい。なんだかんだあったらしい両親のラブ物語は未だに両親の友人達の中では時折話題に上り、わざわざ2人の子供である私に教えてくれる。

まあ、そんな2人の子供だからか、普通の貴族にありがちな余所余所しい寒々しい会話というのはうちにはない。私は両親に大切にされている。愛されている。そこは誇っていいところなのだろう。

「シャル、君は同年代の子供と比べてとても賢い。僕は君を誇りに思っている。だけど、シャル。君は友達が欲しくないかい？」

キタこれ婚約者フラグか！

お友達と称した男どもを私に紹介して、ゆくゆくはその中の1人を婚約者に仕立て上げるということだな、そうだな父よ。

私は父親の申し出を考えるフリをして、実際のところ拒否する余地もないのだろうが、子供らしく目を輝かせた。

「はい、シャルはおともだちがほしいです！」

嘘だ。わめくか泣くかしか能のないお子様なんて友達にいらん。

だが馬鹿正直に父親には言えないので、にっこり笑って本音は隠した。

友達のいない子供ならこう言うしかないだろう。

シャーロットには友達というものがいない。

そりゃあ年上の守役はいるにはいるけれど、友達と言い切るには少し違う気がする。

子供らしくなく、私の守役という立場に嫉妬して意地悪をした子供に逆襲と称して水をぶっ掛けて悪役よろしく高笑いをするヤツを、友人という可愛らしい枠に収めたくはない気がする。

答えた私を見た父親は、親馬鹿よろしく脂下がった笑みを浮かべた。

＊

奥さんに似て器量良しで僕に似て賢いシャルなら友達がたくさん出来るよ、と言いつつ残した父親に置いていかれた私は、残された王城の大きなホールのある部屋で思わず呆然としてしまった。

目の前には、たくさんの貴族の女の子。

年齢は私と同じ10代に満たない子から、10代後半の女性まで。皆が皆、目一杯派手に着飾っていて大変可愛い。しかし一部のたわわなメロンはあれはいいんだ、今にも胸元から零れ落ちそうではないか。けしからん。

当の私も朝から侍女に起こされて大げさなほどに着飾られたのだが、あまり屋敷を出た事のなかった箱入り娘としてはこれが普通なんだろうと思っていた、のだけど。

確かに、確かに私は友達が欲しいと言った。だが、父よ。ここは友達作るところじゃないよね！？ どう見ても王子の婚約者を決めるための舞踏会ですよね！？

心で叫ぶが、悲しいかな父からの返答は当然なかった。

内心は慌てていても、理性では冷静に次の行動を決めていた。よし、飯食って帰ろう。

確か王子のご年齢は14歳だと聞く。

いくらなんでも5歳児を婚約者には据えないだろう。ロリコンじやあるまいし。

だとしたら、私は適度に時間を潰しながら腹を満たして、これからのためにそこその地位の女性に顔売って、父には「おともだちができました」と言っておけばいいだろう。うん、なんかこの案が一番良い気がする。

そうと決まればご飯だよご飯。一番の権力者のいるところなんだし、ご飯も最高級のいい素材を使って一流の料理人によって作られているのだから、美味しいに決まっている。高級そうなお皿の上にあるのは、サンドイッチのようなものからデザートまで。あそこの肉団子も上手そうだ。匂いもしてきて、まずい涎が。と、動いたところで事件は起きた。

ビシャッ、と何か飲み物をぶっ掛けたような水音と、嘲り笑う少女達の声。

「あら、ごめんあそばせ？ 扱けて零してしまいましたわ」

あからさまに嘘だと分かるそれに、ワインをドレスに掛けられてしまった少女はなにも答えられない様子だった。

少女の見た目は、この国の人でいうと大体10代半ば。ドレスは純白で、尚更掛けられた紫のワインの色が目立っていた。ちなみに胸は他の子に変わらず特大のメロンが詰まっている。青い瞳は今にも泣きそうに潤んでいた。

そんな様子の少女に対して、引っ掛けた方の少女が率いる3人の女性達はくすくす笑うのみ。

周りにいる女性達も、自分達が係わり合いになりたくないためか遠目に見ているのみ。

怖っ。女ってこわーい！ いやまあ私もそうだけども。

仕方がないので、溜息を一つ零してから、騒動の渦中へと足を動かした。

私が近寄っているのがわかったのか、辺りにいる少女達が小さくざわめき始めた。あの小さな姫は誰だとか無謀だとか、分かっていますよっての。

少女達の場所にまでたどり着く。

前を見れば、くすくすと嘲笑^{わら}っている女性達が目に入った。なんというか、目に痛いほどにカラフルだ。中央に黄色のドレスの女性、そこから右には真っ赤なドレスの女性、左には青いドレスの女性。……信号？　そう信号カラーだ。懐かしいが笑えてくるのは何故だろう。

信号カラーと対峙している、泣きそうになっている少女のドレスを握り締めている手に触れる。見上げれば、唐突に出てきた私に驚いたのか今にも泣きそうだった青い瞳が驚きで見開かれていた。

うん。女の子は泣くよりもそっちの方が私は好きだ。

につこりと、私は両親がメロメロになっている「僕の可愛い姫の天使の笑み（父談）」を浮かべた。

「おねえさま、ドレスのよこれをおとしてもらいましょう？」

「あ、あなたは……？」

「しつれいいたしました。わたくしは、アルフォードこうしゃくけのシャーロットともうします」

簡略した礼だが、誰も5歳児に完璧さを求めないだろう。というか求めないでくれ。

私の言葉に、少女だけでなく信号カラーや周りにいた女性達まで驚いた表情を浮かべた。あの侯爵家の、とか、あの天才児、とか。

というかお父様よ、私を見て青ざめた令嬢がいるのですが、貴方は普段何をしておいでなのでしょううか。

「さあ、おねえさま。はやくいきましよう?」

「え、あつ、はい」

驚いた周囲を余所に、私は少女の手を取って、端にまで連れて行く。

その場にいた侍女に少女のことを託して、代えのドレスは白を止めた方がいいだろうと一言付け加えた。先程と同じ事がないとはい言切れない。

さてこれから人々の視線を嫌なほど浴びなければいけないのか憂鬱な気分で振り向けば、意外にもその量は少なかった。……ああ、王子様いらしていたのですか。皆様王子様に群がっているのですね。自分の自意識過剰っぷりに恥ずかしくなり顔を赤くしていると、横から楽しげに笑う男の声がした。

「凄いな、君」

「なにがでしょう?」

振り返った先にいたのは、べらぼうな美青年だった。

漆黒の髪の毛はさらさらで、思わず触ってみたくなるような長い髪は頭上でひとくりにされていた。私の乏しい語彙^{ゴサバ}ときでは表現できるはずもない、誰もが見とれてしまいそうなべらぼうな美貌を持った青年だ。周りにいる少女達なんてお呼びでない、と言われてもこの人だったらと納得してしまいそうな程に麗しい。

いったいこの美青年は何なんだろう。騎士となるには若すぎるだろうし、まさか彼も婚約者候補とか? 王子は所謂男にしかくはずほぐれつしたくないとかいう薔薇^{ローズ}的アレなんだろう。

思わず自分の想像に慄いていると、美青年は何を勘違いしたのか

苦笑を浮かべた。

「ごめんね。馬鹿にしたわけではないんだよ」

「はあ」

「ところで王子が来たらしいけれど、シャーロット嬢、君は行かなくていいのかい？」

「はい」

特に行く意義を感じないし。

私は普通に頷いたが、それに驚いたのは目の前の青年だった。

「王子っていえば、君くらいの年だと懂れるものなんじゃないのか？」

まあそうでしょうね。

侯爵家にいる侍女や母親を見ていれば、「王子様」という生物に一際思い入れがあるのはよく分かる。凄いや、王子様には髭が生えない、とかそれはアイドルはトイレに行かないと同じ発想だよ、と若干呆れたのも昔の話。

女性というものはいつまでも夢見る生物である。男性というものがいつまでもロマンチストな生物であるのと同様に。それは世界が違っても、時代が違ってても、人の本質という部分は変わらないものなんだろう。

私も世の中の一般の女性同様、王子様に憧れないわけではない。

だけども、私の「王子様」のイメージって、絵本に出てくるかぼちゃパンツを履いて白馬に乗って齒をきらめかせて微笑っている人なわけ。貧相な想像力しかなくてごめんなさい。

でもって、そんな王子様とはお近づきになりたいはずもなく、遠目から見て笑って転げまわりたいわけである。

それに、正妃を狙う貴族の令嬢方の目が物凄く怖いので近寄りたくはない。

だがそんなことを馬鹿正直に言えるはずもなく、差し当たりのない会話を試みる。

「あこがれます。でもきょうは、おうじさまのおよめさまをきめるためのぶとうかいだから、わたくしはちかよってはいけないとおもうのです」

「何故？」

「わたくしは、おきさきさまにはふさわしくありません」

「……どうして、そう思うんだ？」

いったいどうしてこの青年とこんな会話を繰り返しているのだろうかという疑問はあるが、聞かれた以上答えねばなるまい。

「おうさまは、このくにのたみをせおっています。おうさまがみぎをむくかひだりをむくかで、たみはわらうことにもなくことにもなります」

この国は、絶対王政の形でもって政治をとっている。

君主が統治の全権能を持ち、自由に権力を行使する政体。

憲法を最高法規として据え置き、その上で統治が行われてきた国で育ってきた身としては、時折考えられないような政策をしているときもあるけれど、それがこの国の在り方だ。

「おきさきさまは、そのおうさまをささえるのです。なみたいていのかくごではできません」

場合によっては、王亡き後の統治をすることにもなるのだろう。

次期王位継承者、即ち自分の子供がある程度育つまでは。

そこはかつての世界の過去の歴史からのものだけど、そう遠くはない考えだと思う。

「だから、わたくしにはおきさきさまはふさわしくないのです」

そもそも、こんな子供が婚約者になった時点で政界が荒れるだろうに。

5歳児が子供を産めるようになるまで、最短で考えても後6、7年。その間に王族が全滅したらどうしてくれる。血を継ぐ者がいなくなってしまうじゃないか。

最初から側妃なんか入れたりなんかしたら、正妃の威厳も何もなくなり、それもやっぱりまた政界が荒れるだろう。

だから最初から、私が正妃になる可能性はない。

とはいえ、あの王子に群がる令嬢方に正妃の覚悟があるのかと問われれば、それもなさそうに見えるが。並み居る政界の狸や狐や女豹と渡り合う前にいいように扱われそうだ。

王子様大変だね。だが是非ともあの中から少しはまともな相手を探してくれ、これからの私も含めた国民のために。

さて話し切った、と相手を見れば、なにやら笑みを浮かべていた。その笑みがどこことなく何かを企んでいるような気がして、思わず悪寒が走る。

「5歳でそれだけの考えを持っているのだから、流石はアルフォード侯爵をもってして天才と言わしめるだけはあるね」

「おとうさまが？」

わたくし何を言われているのか分かりません、といった子供らしい表情を浮かべて首を傾げる。

父親が私のことを親馬鹿っぷりを発揮して褒めまくるのは、いつものことである。

あの人のことだから、例えば私が本当の5歳児らしくお馬鹿っぷりを発揮したとしても、同じように可愛い僕の賢いシャル、と言うのだろう。

伊達に生まれた時に恥ずかしさからおしめを変えさせないよう暴れる私と、そんな私を押さえつけておしめを変えさせようとした乳母が戦^やりあった頃からの付き合いではない。

そんな父親の言である。話半分にして聞いてくれればいいのには思^{おも}うが口には出さない。

これから何を言われるのだと身構えていれば、青年は私の前で跪いた。

その仕草も優雅で、この人は貴族かもしくはそれに連なる人なのだろうと想像させた。

「シャーロット嬢、僕に貴方を抱き上げる名誉を頂いても？」

「は、はい？」

私としては、言われた意味が分からず聞き返したつもりだったが青年には了承ととれたらしく、失礼、という言葉と共に抱き上げられる。

些か強引だな、この青年。

青年は私を抱き上げたまま、ホールの中央、すなわち王子様とそれを取り囲む有象無象の令嬢方がいる場所へと進み始めた。

「あの……」

青年に声を掛けた私の言葉も無視だ。

おいこらあの中に放り込んだら恨んでやる。とは流石に言えないので、控えめにずっと声を掛けているが、楽しげに笑うだけで返事も寄越さない。

しかし、それもホールの中央に来たときに変わった。

人ごみの中心にいた王子様が、彼を見た瞬間、安堵の色をその顔に浮かべたのだ。

「あ、兄上。ようやくいらっしやったんですね」

言われた瞬間にはその意味が分からず、王子様の言葉を咀嚼する。

王子様が兄上と呼んでいたということは、この青年は彼の兄なんだろう。

兄、ということとは彼も王族であつて。……王子様？　もしかして、この舞踏会の主役？

「お、おうじさま？」

疑問には、私をその腕に抱えている当人が笑みを浮かべて答えてくれた。

「そつだよ」

そのまま、薔薇青年　いや王子様は私の右手を取り、口元へと持っていた。

「シャーロット嬢、僕の婚約者になってくれませんか？」
「お前ロリコンだったのかー!？」

……ロリコンという言葉がこちらになくて心底良かった。そうだったら今頃不敬罪で首を刎ねられていたね。

そんなこんなで、王子様と私の戦いは始まった、のだった？

ガール・ミーツ・ボーイ？（後書き）

もともとは短編でしたが、調子に乗って続きを書き始めました。
お付き合いいただけたら幸いです。

10/10 誤字訂正しました。

その後の話 1

我輩は侯爵令嬢である。

嘘くさいというなかれ。侯爵令嬢だというのは私の妄想でも今更な中二病でもなく、私は歴とした侯爵令嬢なんだってば。

侯爵は爵位の第2位。公爵の下位、伯爵の上位に当たる。公爵は例外を除いて国王から王族へと与えられる階級だ。したがって、貴族の間では王族でないのなら侯爵が最高位となる。

それを踏まえて、先祖伝来の城や土地を統治して生活が成り立つのだから、うちは上級貴族なんだろう。

下級貴族だったならば、それだけでは生活は成り立たない。

爵位に見合う生活というのは、兎にも角にもお金が掛かる。富と権力を誇示しなければいけないし。

保てない場合は、店の店員として働いたり、畑を耕したりと、そのようにしてお金を稼いでいる貴族も少なくはない。若い女の子だと、私の傍仕えの侍女のように、伝手を頼って行儀見習いとして王城や上位貴族の邸宅へ奉公に出る子の方が多いらしい。

今日は快晴だったので、侍女と守役と共に王都近くにある花畑に来ていた。

何故来ているのかと問われれば、あれだ。最近の私の様子を見かねた侍女達が善意で、お嬢様のお好きな花畑に行きましょう、と善意で連れて来てくれたのだ。

以前、私が花畑に行きたいと言ったのを覚えてくれていた子がいたらしい。

花畑に座り込み、侍女2人に囲まれて彼女達の教えの通りに茎を輪に通していく。しかしこの白い花の名前はなんだろうか。元の世界にはなかったような気がする。

今作っているのは花冠だ。

侍女に何をしたいのか聞かれて、これしか思い浮かばなかった。

5歳の女の子が好きそうなものとして他にままごとが思い浮かんだのだが、いくらなんでもこの年で侍女を相手取ってごっこ遊びとか、羞恥プレイの何者でもないので遠慮させてもらった。いや、この年でって私は今5歳児か。

「お嬢様のお作りになられた花冠、素敵ですわ」

「本当。初めて作ったとは思えないくらい素晴らしいです」

当然だ。初めて作ったわけでもないのに、要領を抑えればある程度は出来る。

だがそんな事を言えるわけもないので、はにかみながらお礼を言う。

「ありがとう。おかあさまは、よろこんでくださるかしら？」

「当たり前です！ お嬢様の作られたものなら奥様も旦那様だってお喜びくださいますわ」

「奥様の為にだなんて、お嬢様は本当にお優しいのですね」

「そんなことはないの」

わざわざ力説してくれたり私の行動に感激してくれる君達には悪いが、これ、計算しているから。

数日前に起きたある出来事に、生来精神的に強くなかった母親は卒倒した。コントのようだが違う。今もベッドの中で唸っている。そんな母に私の作ったものを渡したら、多分喜んでくれるのではないだろうか。

病は気からというし、少しは回復してくればいい。私も絡んでいる事が原因で倒れたので、多少罪悪感があるのだ。

「流石、お嬢様。殿下に見初められたのも……」

「マリア」

侍女の1人であるマリアが胸元で手を組みながら言いかけた言葉を、他の侍女が遮ろうとする。だが残念。ほとんど言ってしまったていた。

恐る恐るといった態でこちらを覗いてくる侍女達に首を傾げて見せる。

「ほんらいは、めいよなことだとおとうさまからききおよんでいるわ。だから、そんなにマリアをおこらないで、リザ」

「失礼致しました、お嬢様」

頭を下げるリザに対して首を振る。

本来は名誉な事だろうそれが今回に限って微妙な空気を孕んだものとなっているのは、ひとえに王子様ことヴィヴィアン殿下の問題発言に起因する。

*

時は数日前。舞踏会に遡る。

「シャーロット嬢、僕の婚約者になってくれませんか？」

「お前ロリコンだったのかー！？」

と、公の場で幼女趣味ロリコンの変態を暴露した王子様だったが、あの後も色々な意味で可笑しかった。

「あ、あにうえ？」

「なんだ」

ぼうぜんとした王子様。いや、今私を抱き上げている人も王子様だな。弟王子の呼びかけに、王子様は爽やかな笑顔でもって応えた。だがこの男はロリコンである。ペド野郎である。王子様で金があつて権力が付随していてべらぼうな美貌を持っていて噂が正しく賢くて性格がよくても、ただその一点だけで駄目だ。身の危険を非常に感じる。ロリコン駄目、絶対駄目。

「兄上が、兄上が……っ！？」

弟王子も今まで知らなかったらしい。ショックだろうそうだろう、私もショックだ。

弟王子は衝撃を受けた顔で後退ると、芝居がかった仕草で大袈裟に頭を抱えて苦悩しだした。彼の頭上からスポットライトが当たつていそうだった。現実には当たってなどいないが。

しばらくの間はそんな弟王子を眺めていたが、ところで、と王子がこちらを見た。思わず体を強張らせてしまう。

「それでシャーロット嬢、このお話を考えていただけますか？」

私は考えた。

頭が痛くなるほど考えた。

「こんやくしゃとはなんですか？」

わたくし何を言われているのか分かりません、といった子供らしい表情を浮かべて首を傾げる。

物の分らない子供にこれ以上話は進められないだろう。上手くいけばこれでなんとか煙に撒けないだろうか考えたのだが、それは浅知恵だったようだ。

王子様の目が嫌な光を帯びて細まったのが見えた。

「シャーロット嬢、嘘はいけないよ」

「もうしわけございません」

勝てなかった。

個人的感情は嫌だろうと、お上に逆らえるほど私には度胸がない。厳格な身分制度が存在している国で、公の場で上に逆らう事がどんな意味を持つか。それが分からないほど子供ではないのだ。

私自身が貴族の一席に名を連ねる以上、婚姻は政となる。

この場で、私が言える言葉は1つのみ。選択肢などない。

それでも、分かっているにも、割り切れない気持ちがある。いやだいやだと叫ぶ心がある。なまじ、前世の私がどう振舞っていたか、それでも許されていた事を覚えているからこそ人一倍反発してしまう。諾と口を開く事を許さない。

ならば解決策はあるのかと問えば、それもない。突発的な出来事に、混乱していて考える余裕もない。機転がきくわけでもない。やるのならば後で、こっそりと裏でやるべきである。付け入る隙は多くある。それでも今は、この局面をどうにかすべきだ。

私は考えた。どうにかする方法を。
知恵熱が出そうなほどに考えた。

その結果。

「……まえむきにぜんしよいたします」

お前はどこの政治家だ！ という回答しか出来なかった。
残念な頭で申し訳ない。

言葉通りに解釈をすれば意欲に溢れているようにも感じ取れるが、
実際のところは『やりません』という意味だ。

かつての私がいた国で、政治を司るお偉いさんがよく答弁で使っていた魔法の言葉である。他に検討します、大変遺憾です、もその仲間になる。

かつての私はテレビでこれを聞くとびによくやるなあと呆れていたが、こんなところで思わず口に出してしまった。

変なところで自分があの国の国民であったという事を実感できたが、これは空しすぎる。

だが、そこで問題は起きた。

「是非とも最良を尽くしてください。後で侯爵にも伝えておきます」

あの『善処やりませんします』は私のいた国の人、しかもごく一部にしか通じない言葉であり、他の国やそもそも世界が違う人にそのニュアンスが通じるわけがない。

しからば当然、王子様に通じるはずがないのだ。
王子様は私のベストを尽くしますという本来の意味に取ったらしく、にこやかに返されたことでその事実を知った。

あれ、もしかして私、承諾してしまったことになる……の
だろう
か？

その後の話 2

「あ、あのおうじさま」

「なんだい？」

「……いえ、なんでもございません」

私には、それはやりませんという意味なんですとは言えなかった。どうにか撤回できないだろうかと頭を働かせるが、それは無理だとの結論に達した。

少なくとも、今のこの状況の私では無理だろう。というか万が一撤回出来たとしても、次の回答も『鋭意努力します^{やりません}』しか思い浮かばない。言葉を変えたところで結局同じ意味な上に迎える結果も同じでは、撤回する意味がない。

機転の利かない我が身を恨めばいいのか、かつての故国でいらぬ知識ばかりを覚えてきた我が身を悔やめばいいのか、答えは出なかった。

だが、こんな事になるなんて普通思わないだろう。

それにしても、何故に王子様はそんなに微笑ましそうな顔で私を見ているのだろうか。止めてくれ、その眼差しは父親を思い出して全身がむしように痒くなってくる。

父親といえば、あの両親は、この王子の申し出を喜んでくれるのだろうか。

婚姻は政。王族や貴族は、一族の存続や影響力の増大を図るために、血の繋がりでもって強固な関係を築いている。

父親と母親も両家の思惑の元、結婚した。

それは王族である以上、王子様も例外ではない。利益になりそうな他の国の王女、もしくは国内の公爵令嬢から選

ぶものだばかり思っていた。

実際に、舞踏会にはそれらしき女性がいたのだし。一際目立っていた赤い髪の女性は隣国の王女様、取り巻きがたくさんいた少女は公爵令嬢だろう。

だからこそ、王子様個人の好き勝手に求婚をやらかすとは思わなかった。実際には王子様はやってくださりやがったわけだが。

それとも、王族の方で私の背景に何か利益になりそうなものでも嗅ぎつけたのだろうか。

権謀術数は王侯貴族のたしなみとも揶揄されるほどに、日々貴族は裏では種々の計略を巡らしている。

そんな貴族社会の中で暮らしていた正真正銘の王族の一員である王子様の言葉だ。もしかしたら先程の求婚の裏には何かあるのかもしれない。とはいえ今の私には分からない以上、考えたところでどうしようもない。

ちなみに侯爵家の場合は、同じ地位である侯爵家、もしくは公爵家か伯爵家、いい場合だと王族と婚姻関係を持つ事が多い。母親は公爵家の出だ。

一応付け足しておく、侯爵家の娘の場合、王位継承権第一位である王子様へ嫁ぐ事は、決してありえない出来事ではない。名誉な事である。……本来ならばな。

微笑ましそうな眼差しの王子様と、蛇に睨まれた蛙のような心境の私が見つめあう。若干、私の頬が引き攣っていたかもしれないが、そこにロマンスは欠片も存在しない。

だが周りにはそう見えなかったと知ったのは、ある令嬢の叫びからだった。

「ヴィヴィアン様！」

「ああ、エレオノーラ嬢。いかがされましたか」

王子様2人を囲んでいた人々の中を割って出てきたのは、私が公爵令嬢だと推測した少女だった。後ろには色とりどりのドレスを着たお供の令嬢方がいた。

見た目は10代後半。

ワインレッドのドレスを身に纏うのは、胸はメロンが詰まっているというのに腰は細いという、豊かな肉体だ。スカート部分は詰め^{ファージン}ゲル物を腰に巻いて膨らませているようで、ふんわりとしたカーブを描いていた。

金の髪は綺麗に結い上げられていて、卓越した技術によって派手な飾りつけがされていた。

顔は、一言でまとめるならば派手な顔である。華やかな印象を植え付ける顔とでもいえるのか。目鼻立ちがはっきりしている分、少しの化粧でも化粧をしつかりとしているように見えるというのに、ばつちりと化粧をしているお陰で物凄く派手に見える。

だがその華やかな顔は、今は悲痛そうに歪められていた。

対して、王子様は何も感じていないのか、先程と変わらないまま微笑を浮かべていた。

悲痛そうな女性を見て何も感じないとは、鈍感なのだろうか。天然なのだろうか。それともワザとだろうか。

「……っ。その腕に抱えていらっしやるのは、どこの方ですか？」

「ああ、この方ですか」

そこで王子様は私を見つめた。ひどく可愛いひとを見る目で。

「彼女はアルフォード侯爵家のシャーロット・イーズデイル嬢です。彼女のあまりの愛らしさに、僕は心を奪われてしまいました」

美青年が頬を染めて一目惚れなんですとはにかむ姿は、他人事だつたらカッコイイとか可愛いとか、周りの女の子と一緒に騒いだからもしれない。

昔なら、携帯の写メで撮りながら友達と騒いだらう。心の底から他人事だつたから。

だが言っている内容が内容だ。変態であることを暴露している内容には、可愛いもなにもあつたものじゃない。むしろ当事者としては自分の身の危険しか感じない。

エレオノーラ嬢にも衝撃的な事だつたようだ。

青ざめた顔でよろめいたところを、取り巻きの女性数人に助けられていた。

もしかして、エレオノーラ嬢は王子様の事が好きなのだろうか。それなら王子様、是非とも君はあの美女に応えるべきだ。いじらしい姿の女から言い寄られて悪い気はしないだろう。しかもメロンで美女ならば、更に申し分はないはずだ。

「ヴィヴィアンさま……わ、わたくしには、目の前の彼女はまだいとけない子のように見えますわ」

「ええ。ですが、愛に年齢は関係ないでしょう？」

関係ある。あるから離してくれ。

だが視線を向けても、王子様はこちらを見てなどいなかった。

「そ、そんな……っ」

悲しげに震える美女の姿は、庇護欲を抱かせた。

ほら行くのだ王子様。私などそこに置いてさあ、さつさとエレオノーラ嬢の元へ行ってしまう行くんだ行ってください心から願います。

「……わたくしは」

さっさと行くだ王子様。

だがそう心の中で語りかけていたのも、次の瞬間までだった。

「わたくしは、お慕いしておりましたの。お父様も元老院に根回ししておくから大丈夫だよと仰ってくださいたわ。……けれど、2人が既に愛し合っていただなんて！」

おいこらちょっと待てや。

止めようとするが、それよりも早くエレオノーラ嬢は取り巻きを置いて去って行った。その速度は、貴族の子女にしては異様に早い。

先程、彼女は何と言った。あいしあう、という摩訶不思議な言葉が聞こえたような気がするのだが。

その意味を再度思い出し、咀嚼して、それから私は王子様を見た。

「おうじさま、エレオノーラさまをおいかけてください」
「どうしてだ？」

こちらにしてみれば、どうして王子様がそんなに不思議そうな顔をしているのかが分からない。

彼女は言った。『2人が既に愛し合っていた』と。そんな事を誰も言っていないのにも関わらず、だ。

きっかけは王子様の言葉だとしても、彼女の思い込みは、思春期の少女特有の思い込みの激しさどころではない。これは捏造の域だ。僅か数分でそこまで思い込めるエレオノーラ嬢を放置しておいたら、それこそ山あり谷ありの恋愛物語が彼女の中で作成されてしま

うではないか。

しかもあの年頃の女の子だったら、きっと周りに話さずにはいられなくなる。そうしたらどうなるか。王子様と私の有りもしない捏造恋愛物語があちらこちらに散らばってしまう。

それは嫌だ。非常に、非常に嫌だ。

だから口にしたというのに、王子様は一瞬だけ考え込んだ後、先程と変わらない微笑ましそうな顔で私を見上げた。

「貴方は優しいね、シャーロット嬢」

いやいや、王子様。君は一体どういう思考回路の末にそんな答えを叩き出したんだ。

結果だけいえば、その後王子様は追いかけてくれなかった。
ひどい。

その後の話3

主に王子様やエレオノーラ嬢の爆弾発言により一部が荒れたまま、舞踏会は幕を閉じた。

だがその後、僅か数日間という短い期間だというのに、驚異的な速さであることが噂となって流れている。

ひとつ、元老院は正妃にボールドウィン公爵家のエレオノーラ嬢を推しているらしい。

元老院とは、王の助言機関のことである。

構成員は上級貴族のみ。私から見て叔父にあたる人もここに在籍している。

そして王は、残念ながら、この元老院の意見をまるつきり無視出来るほどの権威を持っていない。

この国は絶対王政の形態で統治しているが、王権は絶対ではない。王権は、貴族等、特権を有する者が統治に協力することで初めて成立する。だからといって貴族の全てが王族に従順であるかと問われれば、それは否だ。生憎と上位の貴族であればあるほど、従順ではない。それにしても、侯爵家の人間である私が一番言えた事ではないのだろうけれど、身分と忠誠心が反比例しているというのはどうなのだろう。

その上で、歴々の王家はそれなりのバランスをとって王の妃を決めてきた。

それが今回、元老院の思惑とは違い、王子様の独断で動いたのだ。荒れないはずがないだろう。

けれどもし、エレオノーラ嬢の件が彼女の父親が根回しをしたというのならまた違っただろうけれど。仕組まれた八百長だったとばらしたら、面白い事になりそうだ。

ひとつ、王家は今のところ沈黙しているらしい。

王子様の爆弾発言に対しても、今のところ何も表明してはいないみたいだ。

出来ればどういふスタンスでいくのかを知りたいから、早めに意思表示をしてもらえた方がいいのだが。

まさか息子を誑かしたとか言い掛かりを付けられないとは思っていないのだけど、どうなんだろう。

ひとつ、アルフォード侯爵家のシャーロット嬢のあの姿は仮の姿で、実際は妖艶な美女である。あの幼子の姿は魔法でわざと見せているらしい。

嘘だ。これは間違いなく嘘であると私は断言しよう。

私の心も体の年齢も、見た目通りの5歳児である。転生する前の年齢？ それは乙女としてはカウントしないのがお約束でしょう。

ひとつ、ボールドウィン公爵とアルフォード侯爵の間で激しい政治闘争が繰り広げられているらしい。

2人が狙っているのは、王子様の正妃の座だとか。互いに娘を正妃につけたらしい。

ボールドウィン公爵の方が有利そうだが、相手はあのアルフォード侯爵である。一概にどうとはいえないようだ。ところで父よ、あの侯爵、と囁かれるなんて貴方は普段何をしておいでなのでしょうが。

ひとつ、これが一番凄かったのだけど、予想通りというかなんというか、私と王子様の捏造に捏造を重ねた恋愛物語。ラブロマンス

登場人物の名前以外に合っているものない、悲劇あり喜劇あり捏造ありの物語である。

噂の中では、小さな頃に花畑で出会った王子様と侯爵家の娘シャーロットは、互いに互いが何者かを知らずに結婚の約束をした。そして成長をした2人は、とうとう王宮で再会した。惹かれあう2人だが、王子様には既に婚約者であるとする公爵家の令嬢がいた。人に隠れて逢瀬を重ねてゆく2人。好きになってはいけない人なのに、それでもどんどん深みに嵌まっていく。そんなシャーロットだったが、彼女が弟王子の目に留まり、無理やり彼の婚約者とされてしまい……。続きは次の噂で。乞うご期待。

いや、守役から聞いたのは本当にそんな噂だった。聞いたときは本当にたまげたね。どっかの小説で読んだような話だ。

こちらに関しては、主に貴族の女性の間で広まっているものらしい。

世界が違おうとも、乙女のツボを突く王道的な恋愛物語ラブロマンスは共通しているらしい。

もうなんというか、ここまで自分に掠らない噂だと次はどうなるのかある意味気になってしょうがない。『とある公爵令嬢』の捏造話から、何がどう転がってこのような話に発展したのだろうか。弟王子なんて、その場にいただけなのに悪役にされているなんて可哀相に。

総じて、あからさまな嘘が混ざっているものの、大半の人には嘘か本当か判別のしにくい噂が出回っていた。

そもそも噂なんてただの伝言ゲームなのだから、人から人へ伝えられていくうちに正確な情報は歪められていく。

特に人は噂程度ならば、事実を正確に伝えるというよりも、聞き手が面白く感じるのなら多少の話の拡大はやむなしと考える人の方

が多い。もしくは、そう思い込んだ上で口にしてしまうか。

かくいう私もその口である。過去に幾度となく、聞いた噂に尾ひれ背びれを付けて人に伝えてきたか。

だから、自分に関係ない、しかも面白そうだからと噂をしたくなるのもよく分かる。分かるのだけど、そのせいで今回は噂の人物として人の視線に晒されてしまっている身としては、勘弁してくれと言いたくなる。

そして、本来ならば名誉な話が、今回は同時に政権争いを始めとして様々な問題を起こしてしまっている。その上この話が最終的にどこへ落ち着くのかも分からない。

お陰様で微妙な空気を孕んだものとなってしまう、子供の私に対しては皆どう対応していいのか分からないのだろう、腫れ物に触るような扱いになっているのには苦笑いをしてしまう。

「姫様ひいさま、花冠というものは出来ましたか？」

唐突に後ろから話しかけられるが、私は焦らず、後ろへと振り返った。

そこには、1人の少女がいた。

この国では数え年で年齢を計算するようなので、年は15。薄い金の髪を頭上で一つに纏めていて、そこに髪飾りはなく、随分とシンプルな髪型だ。すらりとした身に纏うのは黒一色の、この国では珍しくも男性と同じズボンを履いている。

父親の一族に連なる者で、その姿からは分からないが、歴とした貴族のお嬢様である。

翠の瞳が綺麗で、微笑わらいうと普段の凜とした様子からは想像できない程に可愛く見える、私の守役の1人だ。

「ええ、できたわ。みてブリジット」

完成したばかりの花冠を見せれば、彼女は年齢にそぐわない仕草で鷹揚に頷いた。

「流石です、姫様。素晴らしい花冠です」

「……そこまでほめられるほどのきではないわ」

「いいのです。姫様の手が入った品に出来ないものは御座いません。このブリジットは存じております」

そして、少々どころかかなりの過保護シャーロットはかでもある。

初めて会った時は敵意むき出しで睨みつけられていたはずなのに、どこをどう間違えてこう真逆な態度になったのだろうか。謎だ。

ブリジットは膝を折って屈みこみ、私と視線を合わせてくれた。

彼女は精神的に擦れた私と違い、真正正銘の貴族のお姫様である。時折、手ではなく足が出そうな私とは違い、最近は何りの人間、特に一部の騎士に感化されて雑な仕草も増えてはいるが、それでも流れるような優美な仕草を意識せずとも出来るお嬢様だ。私とは違い外にほとんど出た事がなく、花冠すらも作った事のなかった、まさに深窓の令嬢だ。

「では姫様、そろそろ邸宅へ戻りましょう」

「ええ」

「お待ちください、ブリジット様。お嬢様はまだ外に出てから、そんなに時間が経っていませんのに……」

ブリジットを止めようとするマリアを、彼女は冷ややかな視線で見つめる。

そういつた視線に慣れている人ならばともかく、馴れていない少女には向けるのは少々酷だろう。案の定、マリアの顔が強張った。

「今、姫様の周りでは、何が起こるか分からない状況となってます。出来うる限り姫様の御身から危険を遠ざけようとする事の、何が悪いと？」

「で、ですがお嬢様はまだ5歳です！ 5歳の子にそんな無理を強いるだなんて！」

それでも必死にブリジットに食い下がろうとするマリアを、思わず感嘆した眼差しで見つめてしまった。

私がいえた事ではないが、マリアは貴族の娘にしては些か甘い面がある。

甘っちょろいというか、年の割には可愛らしい考え方というか。子供は大人が保護して、細やかな気遣いや情愛を与えるべき脆い存在だと見ている節がある。周囲に大切にされてきたのだろうと推測の付くぐらい、彼女の考え方は貴族という人種にはそぐわなかった。反面、ブリジットは貴族社会の中で育ってきた、真正正銘の貴族のお姫様だ。

貴族の事は同属である貴族の方が一部分ではよく分かっている。子供だろうと、周囲がそれで容赦してくれるはずもなく、いいように利用されてしまう事を彼女は理解している。どれだけ相手が子供だろうと、厳しくしなければいけない事がある事を知っている。今回の花畑に行く事も、彼女はあまりいい顔をしていなかった。それでも来させてくれたのは、彼女なりの譲歩だったのだろう。

まあ何がいたいかといえば、ちょっと突けばへこんでしまうマリアが、私の為にブリジットに立ち向かった事に驚いた。

しかし、お陰でただいま妙な空気になってしまっている。

私が下手に何か口を出せば、余計にこんがらがってしまいそうだし、やめて、私の為に争わないで！ とか悲劇のヒロインぶって言うてみよつか。流石にひかれるだろうな。

既に涙目になってしまっているマリアと、冷やかな眼差しのリジット、そして2人の間で見守るしかなかった私の間の妙な空気を破ったのは、残った最後の1人であるリザだった。

「花冠は早めに持っていかなないと、萎びてしまいませんか」

確かに。

淡々としたリザの言葉に毒気を抜かれたのか2人が同意すると、リザに指示されてそのまま邸宅へと帰る流れになった。

「さあ、お嬢様もお立ちください」

「ええ」

リザ凄いと凛としている間にも、手を引かれてそのまま邸宅へと帰る運びとなった。

ぼんやりとしながらも、私は、そういえば、と気になった事を思い出す。

そういえば、王子様の噂が最後の噂以外まったく流れていないのは、噂をすれば不敬罪に当たるから？ それとも、意図的に流れていないの？ どっち？

はじまりの王

部屋に置かれたドレスサールの鏡面台を見つめながら、私は唸る。

オリオン・ブルーの瞳はまんまるで大きい。その瞳を縁取る睫は、冗談じゃなくマッチ棒が乗るんじゃないだろうかという程に長い。薔薇色に染まったまろい頬には、睫で影が出来ている。何も塗っていないのに艶やかなピンクの唇。濃い金の髪は緩やかにウェーブを描く。背にまで届く長さだが、侍女の日々の努力の賜物が痛みはなく艶やかだ。

目線を下げれば、小さな白い手が見える。貴族階級の人間らしく、その手は荒れることもなく日々の手入れで綺麗だ。

まるでお人形のように、とても可愛らしい少女。

男女で美醜感覚が違うとしても、この少女の愛らしさは性別を越えて共感してもらえるものだと確信している。

母親譲りの美貌を受け継いだ、将来が楽しみな少女である。それが自分でさえなければ。

このほつぺたぶにぶに美少女が私なのだけけれど、昔の自分に関する記憶があるせいか、何度見てもこれが「私」だという確信が今ひとつ持てない。違和感を感じてしまう。この姿は被り物みたいだ。ピンクの裾にレースがたくさんついたドレスだって、昔では似合わなかった。

それがこの姿では似合っている。

昔の面影なんて、欠片もない。

「ブリジット」

「はい、姫様」

ドレッサーから降りながら守役の名を呼べば、即座に部屋の隅から返事が返ってきた。

それにしても、この体では椅子に登るのも降りるのも一苦勞である。

結局途中でブリジットに危ないからと持ち上げられてしまうのも、仕方がない事だとは分かっているのだけれど少々複雑だ。……ちょっとその侍女2人、微笑ましそうな顔でこちらを見ない。

「姫様、そろそろ先生がいらっしやるお時間です」
「わかったわ」

頷いて、先生が既にいるだろう部屋へ向かった。

私の勉強を見てくれている先生のうちの1人は、頬から顎にかけて豊かな髭を蓄えた老人である。

これで黒いローブを着込んでいれば魔法使いといわれても納得してしまいそうだが、生憎彼は歴史専門の個人指導教師だ。

先生は、5歳児に対しても容赦がなかった。

具体的に何が容赦なかったかとすれば、私が5歳である点を考慮せず難しい語彙を使いお話してくださるところだろう。

「姫様^{ひいさま}、本日はこのアーシュニウル王国の初代王についてお話ししよう」

「はい、せんせい。よろしくおねがいします」

ここにはノートもシャーペンもない。

記して残す物が何もないので、先生の流れるような早さの講義を必死になって覚える。

先生の話は、以前に歴史書で読んだから大体の事は理解している。だからこそ疑問に思う事がある。

アーシュニウル王国の建国にまつわる伝承には、不可解な謎が多い。

その最たるものが初代王の存在そのものだ。

あの王子様も含めた王家の祖先である建国王、リユージン・アーシュニウル初代王は、生まれも育ちも後世には残されていない。いや、残されていないというと語弊がある。

彼は、女神セーレンシアによってこの国に遣わされた、彼女の子であると後世には残されている。

子とは即ち、初代王も神だったということだ。

そこまでくると、途端に眉唾物の話になってしまう。

だがそう感じているのは私だけのようで、先生の話は違っていた。

「大陸新歴1100年、今より200年ほど前の時代です。初代王は、当時の民の嘆きに慈悲を下さった女神が遣わした御使いです。女神の御許で得た見知らぬ知識を扱い、幾多もの国を平定しました」

先生を始め、この国に生きる人にとっては当然の話らしい。

私の常識が通用しないのは分かってはいたけれど、分かっているのだけだ。ここで当然のように女神の子と言われてしまうと、なんともしえない気持ちになるのは何故だろう。

流石、魔法も魔物もある世界だ。女神もなんでもありらしい。

私としては眉唾物の話とは考えたけれど、話のすべてを嘘だと切り捨てる事が出来ないのは、先生の言った事があるからだ。

初代王は、当時の誰も知らない知識を持っていたらしい。

戦争等で焼かれてしまいあまり多くは残っていない歴史書だけでなく、その数少ない歴史書によれば、確かに初代王が君臨する前とその後では、統治の仕方も民の生活水準も戦争の仕方も大きく違っている。

個人的に一番有り難かったのは、やはり風呂。初代王が統治した頃は、病気の元が水にあるとして風呂に入る習慣は廃れていたらしい。お風呂をこよなく愛しているというわけではないが、せめて1日一回は入りたい。もしこの時代にいたら、私は耐え切れなかっただろう。

各地にいる領主がメインとして統治していた封建制から、王が強大な権力を持った絶対王政へと統治の仕方が変わったのも、この建国王の時代からだ。

「初代王は、商業で力を付け始めた大商人達に特権を与え、配下に収めました。そして今までは持たなかった軍隊を整え始めました。貴族同士や魔物との争い等に疲弊し力を失いはじめていた各貴族が、強大な力を持ち始めた初代王の庇護を求め集い始めたのも、自然の成り行きといえるかもしれません。一番の理由は、初代王が女神の眷属だった事もあるのでしょうか」

それにしても、王権神授説の思想は知っていたが、この国では支配権は神によって授けられたものどころか、神自体が王になってしまっていたとは恐ろしい。

軍隊も加わってしまえば、王に逆らえる者などいなさそうだ。

「せんせい」

「何でしょうか、姫様」

先生というか髭を見つめながら、私は考える。

本当に、初代王は人間ではなかったのでしょうか？

聞いてしまっていていいものか。下手をすれば王家を愚弄していると
して不敬罪とされてしまうかもしれない。

それにしても、おかしい話ではないだろうか。

私の知っている限り、神という存在は人を慈しむものだったはず。
それが人の上に立ち人を支配するのか。

けれど仮に人間だったとして、だ。初代王はそれまでの人が持ち
得なかった知識を、一体どこから拾ってきたのだろうか。

それに1つだけ心当たりがある。

かつて見た初代王の肖像画は、顔の雰囲気は醤油顔っぽく、髪の色は黒だった。

この国の歴史は、他の時代には違いがあるというのに、初代王の
時代において最初の頃だけはかつての故国で習った歴史とよく似て
いる。

そして、結果としては民には浸透しなかったが、男女平等を謳い。
当時は8歳で小さな大人として扱われてしまう子供の件で国に対し
て、子供という概念と、無垢な存在である子供を保護する必要性を
説き。男女が共に学べる教育機関を作った事。

身分に囚われず、官僚に有能であるのなら貴族だけでなく平民も
取り入れた事。

当時の人達には、あまりに突飛過ぎて受け入れられなかった部分
もあるけれど、やりたかった事は分かる。

これは穿った見方だろうか。

けれど「私」という例がある。私の前世での記憶が、ただの私の
妄想でないというのなら。それもまた、決して有り得ないわけでは
ないと信じたい。信じていたい。

「……姫様、本日はこれで終わりにしましょう」

私が何も言わない事に呆れたのか、先生が授業の終了を言い渡す。

「せんせい？」

「今、ご自分がどのような顔をされているかお分かりですか」

「いいえ」

「鏡を一度ご覧になってください。泣きそうですぞ」

頬に手を当てるが、泣きそうになっているというだけでまだ泣いているとは言われていなかった事に気付いて手を下ろす。

泣きそうだったのか、私は。安堵で？ 嬉しさで？ 不安で？
どれもが合っていて、どれもが違う気がした。

落ち着いた事に気付いたのか、先生の目がゆるりと三日月を描いた。

「時に、姫様。ゴカイレンジャーというものはご存知ですか？」

「はい」

子供、更に限定するなら幼児の間で大人気の所謂戦隊モノだ。

リーダーで熱血なレッド、二枚目で頭脳明晰なブルー、ちよっと太めで黄色い食べ物が好きなイエロー、紅一点で見目の綺麗なピンク、他のメンバーに美味しい場面を取られてしまい影が薄くなりがちなグリーンからなる5人がチームを組み、悪である魔物、ひいてはその親玉である魔王に立ち向かうストーリーだったはず。

彼等がピンチになると、時折仲間としてクールで二ヒルなブラッ
クや、純粹無垢なホワイトが助けに入っている。

1ページごとに誰かしらが「誤解だ！」と叫んでいて、それはレッドのご飯をイエローが食べてしまったというくすりと笑ってしま

う微笑ましい疑惑から、奥さんに不貞を疑われた旦那さんが刃物を
掴んだ奥さんを目の前に叫んでいたりとシニールな場面まで色々
ある。それがゴカイレンジャーの名前の由来らしい。

全30巻からなる超大作だ。

侯爵家うぢにもあり、以前読んだ時はどこの世界でも戦隊モノを作り
出す人がいるのだと驚いた覚えがある。

ちなみにこのゴカイレンジャーだが、私達の親世代が子供であつ
た時からあり、今も幅広い世代に親しまれている。

「私の孫もレッドが好きで、会う度に魔物役をやらされていていま
ね。年寄りには少しきついです」

首を竦める先生に、頬が緩む。

何処の世界でも、戦隊モノに憧れる子供の取る行動には変わりが
ないみたいだ。

だけど、笑っていられたのも次の瞬間までだった。

「このゴカイレンジャーの本の著者が、初代王だと伝えられていま
す」

先生を凝視するが、当の本人は笑ったままだった。

「後の世の人にまで好かれる物語を書く等、様々な分野で初代王は
造詣が深かった事が分かる話です」

いやあ、半端ないわ、初代王。おなじくのなかま

魔法の使い方1

三つ子の魂百まで、という諺が故国^{こくに}にはあった。
幼さいころの性格や性質は、年をとっても変わらないという意味
だったはず。

私がシャーロットという異世界の人間になっても、私は『私』だ。
この身が侯爵家の血を引いたやんごとなき生まれのお貴族様だと
しても、綺麗なもののだけを見て、高価で綺麗な物に着飾られて箱入
り娘として生きてきたとしても、根っこは日和見主義で打算的なわ
けである。

生憎と、アーシュニウルの民である事に誇りを持つように、アル
フォード侯爵家の娘である矜持を胸に抱くように、政略結婚を当然
と思うように、と生まれた時から叩き込まれようと、素直に受け
入れられない。

空気を読んで表面上は頷いているだけで、理解はしているけれど
納得しているわけがない。

私は『私』。それは何があっても変わらない。

変わらないのだ。

だから、そう。

「本日もご機嫌麗しく何よりでございます、ご令嬢。私が貴方様の
魔法をお教えることとなりましたハーキュリーズ・オルコットと
申します。今後よろしくお願い致します」

「いーや、あああああああ！」

魔法で人を宙に浮かすのは止めて！ マジで止めて止めるお願い
止めてください紐無しバンジーは怖いんだってば！

＊

貴族の娘には、教養が求められる。

教育ではなく、教養。貴族の娘に、いずれは夫人としてお邸の主となる娘に教育というものは必要ないというのが大衆の見解だ。

礼儀作法から始まり、音楽、縫い物、刺繍、ダンス、絵画、読み書き、算数、各国の言語。

他にも必要に応じて、旦那を都合よく取り込む術、ならぬ旦那を魅了する方法の勉強とか。口調から思考から褥の中までとその種類は千差万別。

しかし5歳児にこんなことを教えるよりも、もっと違うものがあるだろうに。情緒面で変な方向へと突っ走ってくれたらどうしてくれる。

再度強調するが、貴族の娘に、教育は求められていない。

王の妃となる者ならば話は別だろうが、貴族の娘や夫人が政権に口を出す事をよしとはしていない風潮で、自分の娘に教育を施す親は少ない。

朝、父親から聞いたことに驚いたのもそのせいだった。

「わたくしに、まほうのせんせいですか？」

食事の手を止め、驚いた声をあげた私に、父親は笑みを浮かべた。考えるために視線を下へと落とし、朝から多くの種類を並べられている食卓の上の料理の品々を見つめる。

この国の食事は、フランス料理に近い。

トマトに近い食材であるレビーという食材を用いて、ニンニクや香草を味付けとした食べ物が多い。

魚介類もよく食卓に上るので、海が近くにあるのだろう。

パンも焼いたばかりなのだろう、まだ温かくて、焼きたてのような匂いがした。

基本的には貴族階級の人間が食べるものだ。

出される食事は、舌の肥えた私でもだいたいは食べられる。……

養われている身で、ただの穀潰しな身で、大変申し訳ないとは思っているのだけれど、一部の肉類や魚介類は生臭かったり香辛料のキツさで、食べているときに涙が出てきてしまう。涙が出るだけならマシだ。

お陰で自主的に食べる量を制限せざるを得なくなる。

食事のたびに、故国こくにの料理が恋しくなる。

白米、味噌、醤油、蕎麦、うどん、チョコレート、ケーキ、カレー、ラーメン、天丼。ああ懐かしい。

プリンなんて、触ればぶるぶるとしている。その上、食べれば口の上でふわっとカスタードの甘い香りがしたと思えば舌の上でとろりと溶けて、更にはカラメルの仄かな苦さがアクセントとなって。冷たいあのお菓子。思い出したら涎が出てきた。

プリンの味を思い出していると、笑顔の父親と視線が合った。

ああそうだ、プリン……いや、そうではなく、今は父親の話だろう。

魔法は、教養ではなく教育に分類される。

現に母親は魔法の教育を受けてはいないはずだ。

それなのに私に教育を施すなんて、父親は何を考えているのだろうか。

「そうだよ。シャル、君は聡い子だ。本来はもつと後に学ぶものだろうけれど、私は君ならば理解できると踏んだ。どうだい？」

父親には悪いが、どうだいと聞かれてもさっぱりだ。どうだい、の以前に私自身に判断基準がない。

とはいえ、馬鹿正直にそれを口に出来るはずもなく、私はぶりっ子のごとく胸元で両手を組んで喜ぶフリをした。

「わあ、まほうがつかえるのですね！　うれしいです！」

嬉しいですよ、と大げさに喜んでみせる。

子供というのも、案外楽ではない。

けれど、魔法というものに心が沸き立っている事も事実。

手を出して一呪文で城も山も破壊できるようになるのだろうか。

どんな難病も、たちどころに治せたりするのだろうか。

黒猫が喋ったり、箒で空を飛んだり、人の名前を奪って働かせたり、炎が喋ったり、老婆や案山子や豚に変えられたり出来るのだろうか。頭の中では、赤い豚がニヒルな笑みを浮かべて飛行機で飛んでいた。

私の『魔法』というものの見方など、ほとんどが映画やアニメからきているものでしかなく、要はなんか不思議だけど凄いものなんだろうというものでしかない。

それでも、もし、火を灯せ、水を何もないとこから出せるのが、

何かを壊せるのが魔法なのだとしたら。

突き詰めれば、何をも破壊出来るものへとなるのではないだろうか。

魔法使い1人さえいれば、それは幾人もの、幾千もの兵力を1人で代用できるということになる。場合に寄れば、それ以上もの力となる。

それは、凶器類を法によって持てない環境で庇護されて過ごし、今もなお人の保護下で守られて生きている私にとっては、怖いものでしかなかった。

先生は知っている人だから、と言い残して王宮へと行ってしまった父親を見送りながらも、一抹の不安を覚える。

生まれて5年。箱入り娘として育っているシャーロットが知っている人など、本当に数少ない。

両親に、乳母、乳兄弟、守役のブリジットに、私の身の回りを世話するリザやマリアに他数名の侍女、侯爵家に所属する騎士数名に、この邸宅の家令、父親の友人、私の勉強を見ってくれる先生が数名、という程度だ。……ああそうだ、王子様と弟王子様を忘れていた。

その中に、魔法を使えて、更に人に教えられるほど知識の深い者などいただろうか。

王族2人は問答無用で除外するとして、両親もないだろう。

ブリジットや侍女、家令も今まで接してきてそんな話は欠片も出てきた事がないので除外。

私の勉強を見てくれる先生達に魔法の心得のある人などいただろうか。歴史専門の先生は、見た目的に怪しい。

考えても分からないが、答えは、嫌でもあと数時間後に判明するだろう。

今悩んでいても仕方ない。

思考を切り替えて、リザとマリアを呼ぶ。

「いかがされましたか、お嬢様」

「としよしつから、しよだいおうについてかかれたしよもつをもつてきてほしいの」

建国王リユージーン・アーシュニウル。

私の前世の同郷かもしれない人。

別に調べたところで何があるわけでもないが、知りたいじゃない。その人がどんな道を選んで、どんな道筋を辿ったのか。

その人生は、幸いの多い人生だったのだろうか。

辛いこと以上に、笑える事が多かったのだとしたら良い。

別れ以上に、たくさんのお会いがあったのだとしたら嬉しい。

会話をしたことも、会ったことすらもない人だけど。同じ故郷の人かもしれないというだけで、身内意識が芽生えるのは本当に不思議だ。

ちなみに、私が部屋から動こうとしないのは動きたくないからというわけではない。

私が動くと、私の護衛をしている人達が大変になる。

私の行く先に危ないものがないか。部屋ならば、先に行って調べる。私が歩く間も、注意をして周囲を見回らなければいけない。

自分の邸宅だからといって、何時誰が危害を加えないとも限らない。

特に、今の私はある意味時の人として話題に上げられることが多いという。その状況で、誰がなにをするかなんて分からない。

もし、私が今図書館に行きたいと言って行動してしまえば、何人

もの人の手を煩わせることになる。

それならば、誰かに行ってもらう方が煩わせる人の数を減らす事が出来る。

だから私がぐーたからだというわけでは、決してない。決してないんだって。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0545x/>

生まれ変わり大作戦！

2011年11月20日02時58分発行